SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

Report on a Local Survey in Southern Sakhalin of Public Halls During the Japanese Colonial Period (1905-1945)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井原, 麗奈 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027537

日本期の南サハリンの公会堂に関する調査

井原 麗奈（静岡大学地域創造学環）

はじめに

近代において日本は北海道、沖縄、さらに台湾、朝鮮半島、サハリン南部、南洋を領有、満洲（中国東北部）も含む広範な地域に版図を拡大して植民地化し、多くの日本人を移住者として送り出した。サハリンは 1867 年の樺太島仮規則で日露双方の雑居地となり、1875 年の千島・樺太交換条約でロシアが樺太全島を、日本が千島列島を領有することが定められた。日露戦争後の 1905 年にポーツマス条約により北緯 50 度以南が日本領となり、1941 年には人口が約 40 万人となった。そのうち日本人は 38 万人、朝鮮人は 2 万人であった。約 1200 人のアイヌ民族は日本国籍とされたため、38 万人のうちに含まれた。

新天地で新たな生活を始めた人々が頼るのは、同国人・同郷人の地域コミュニティである。筆者は「公会堂」を、そのコミュニティを形成し、支えた場所・空間として捉え、主に朝鮮半島を対象に研究を続けてきた。本稿は 2019 年 8 月 28 日〜9 月 1 日に旧樺太（ロシア・サハリン州）で行った現地調査報告である。朝鮮半島の事例の特徴をより明確につかむためには、他地域の公会堂設置に関する状況を知り、客観視する必要があると考えたためである。今回は旧豊原（現ユジノサハリンスク）、旧本斗（現ネベリスク）、旧真岡（現ホルムスク）、旧大泊（現コルサコフ）で調査を行った（以下植民地期について記述する場合は旧地名で表記）。図 1 の丸囲みの箇所が今回の調査地で、本稿に掲載した写真で注が無いものは、全て筆者が 2019 年 8 月 29 日〜9 月 1 日に撮影したものである。

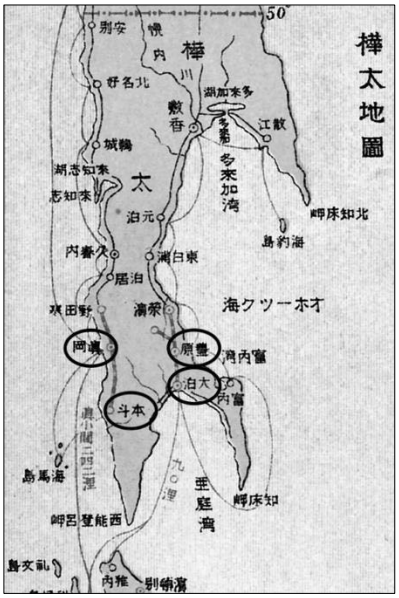

図 1：樺太地図 絵葉書（部分）
（札幌市中央図書館デジタルライブラリー蔵）

1. 豊原

豊原は樺太最大の都市で、1907 年に樺太庁が置かれた。豊原公会堂は 1925 年 8 月に皇太子時代の昭和天皇[1]が高松宮と久邇宮を伴って樺太を行啓[2]したことを契機に設置され、豊原町役場に併設されていた。木骨鉄鋼コンクリート 2 階建で、工費は 101,650 円、1928 年 1 月に焼失した（図 2・3）。同年 11 月に役場は再建されるが、公会堂は併設されなかった（図 4-1）（井澗 2000：626-627）。以降、集会は学校等で行われたようである[3]。再建された建物は、樺太の役場としては唯一現存しており、現在はオフィスとして使用されている[4]（図 4-2）。

図 2：豊原町公会堂（現存しない/絵葉書筆者蔵）

殿下を迎へ奉る豊原の光榮に輝く公會堂
洋風の建築は豊原隨一

國民の慕ひ奉れる攝政宮殿下日本海形と洋式の折衷色の行啓に際しこゝが光榮を永久に紀念すべく豊原町では多年の宿望で あつた公會堂を十四万二千圓の巨費を投じて此程完成を告げ たが出來上がつた公會堂を見るに其内容に外觀に實に誇るに足る豊原出色の偉容であるハイカラな純洋風づくめで先づ正面は建築の粹を凝したセセッション式の

玄關口

車寄せとポールを高くたてた塔に裝飾し白灰色の洗出しに石形モルタルを塗けるコンクリートの宏壯なる玄關式に近世式其他のあらゆる模式を混合せる設計の粹をコンクリート門柱に通じたる電燈とよく調和して實に見事な出來栄は藤巻七氏の

請負に

かゝり町役場技手後藤種助氏の設計に成るもので五月四日に基礎工事に着手し七月一日に竣工したが工事期は八十日で五百八十坪の建築費の人夫の努力を滑りなく終了した藤巻氏の

本館は

八万四千四百五十圓で九万六千九百十圓の計算で建築費は其他工事が一万二千四百五十圓で

車寄せ

竣工を上つて入ると突當りが受付室で其右側は六十坪の大食堂左に行けば撫廣間に小食堂がある廊下を奥に行くと大食堂に隣して控室あり其奥は常直室に欧風の炊事室がある炊事室は三百人以上の食器を用意し何時でも案内の料理を出せるやうになつて居り地下室も造つてある。階段は東西の

両側に

階段があり東側は貴賓室に通ずる。東口を登ると右に御座所に通ずる。東口は通常出入口で東側は貴賓室に接して化粧室、浴室、便所等何れも洋風の美タルがあり左は御召替室、其東側に繋がる貴賓室はリノリュームの上に絨毯を敷き窓は絹ドンス、毛ドンス、レース、ブラインドの四重カーテンを以て

装飾し

御座所室には別に漆喰の露臺が外部に突出し方の講演室に出ると西の七百餘名の講演者が居る。夫から西の方の講演者は全部白の純毛の洋服を着用し百二十の出張所員は並列して見るだけに隨分い格形の演壇に見るやうな氣持ちがするテーブルの周圍は全部純毛の光沢のある絨毯を敷き窓は二十八坪の喫煙室が設けられ更に南側に洋式の便所がある大体上記の如き内容で外觀は南北に公會堂の敷地は南北四十五間二千七百六十間の東西四十五間二千七百坪である。

図 3：『樺太日日新聞』1925 年 8 月 10 日

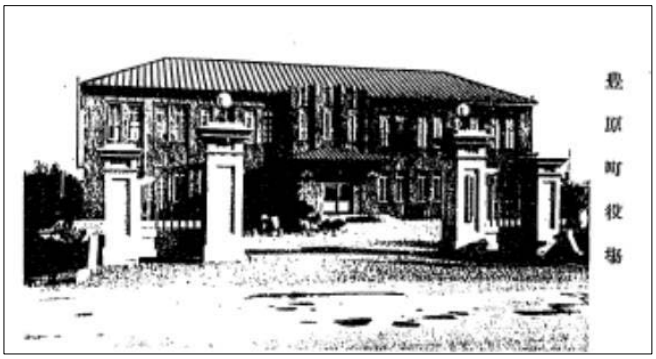

図 4-1：再建された豊原町役場
（『樺太庁施政三十年史』[5]）

図 4-2：現存する旧豊原町役場

2. 本斗

間宮海峡側の港町で、冬場に多くの港が凍って使用できなくなる北方地域で、不凍港として重宝された町でもある。公会堂の設置年は不明だが、町民が正装をし、公会堂の前で撮影した写真が存在するため(図 5-2)、豊原と同様に 1925 年の行啓の奉迎を機に公会堂が設置されたとも考えられる。（一社）全国樺太連盟が引揚者からのヒアリングで作成した地図（図 6）から、この公会堂も役場に併設されていたことがわかる。図 10 からこの公会堂で国防婦人会の集会が行われたことがわかる。このような催事の事例は国内でも他の植民地でも見られる。公会堂を拠点として植民者同士の紐帯をより強固なものにし、また地域を挙げて銃後を守る組織が、帝国の版図の隅々にまで行き渡っていたことが確認できた[6)]。

図 5-1：本斗公会堂（現存せず/絵葉書筆者蔵）

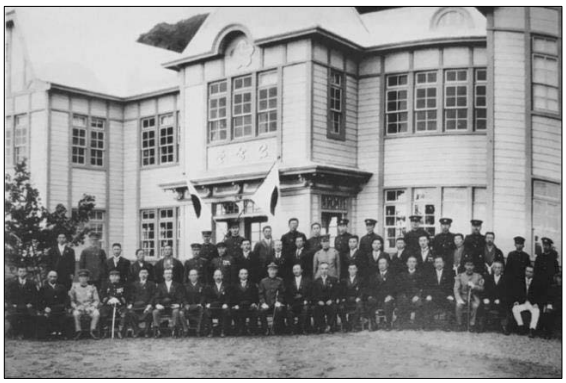

図 5-2：公会堂前に集う人々（（一社）全国樺太連盟[7)]）

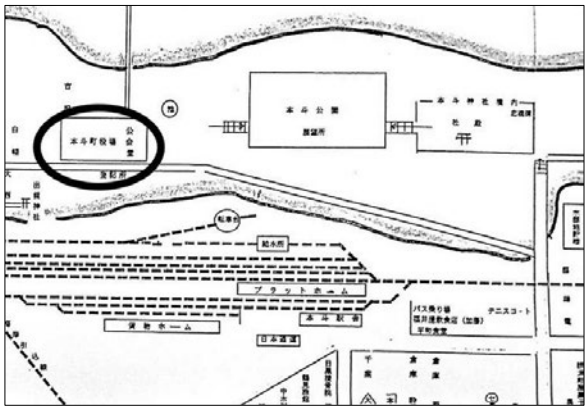

図 6：本斗公会堂の位置（（一社）全国樺太連盟[8)]）

図 7：公会堂が設置されていた周辺の丘

海側から丘を望む

図 8：地図上の「本斗公園」跡

丘側から海を望む

図 9：地図上の「本斗公園」の左側に見える階段

本斗公会堂跡地は私有地とみられる

図 10：国防婦人会の集会（(一社) 全国樺太連盟 [9]）

3. 真岡

本斗より 50Km 北に位置する、間宮海峡側の港町。終戦 5 日後の 1945 年 8 月 20 日、ソ連軍による海上からの艦砲射撃と 3,500 人の兵士の上陸により、多くの住民及び避難民の犠牲を出した町でもある。真岡公会堂は 1928 年に昭和天皇の即位を契機に鉄筋コンクリート造で設置され、1945 年に焼失したとされる（井潤 2000：629）。町役場、商工会議所、農業会を併設しており、来場者が目的の場所へ直接入れるよう、それぞれに通じる入口が設けられた。図 11-2 の右角が公会堂へつながる入口であることから、塔の部分が階段となっており 2 階の公会堂部分へ上がることができたと推測される。正面中央が 3 階の商工会議所、右奥が 1 階の役場の入口だったことが複数の地図や写真から読み解ける。このように入口が複数設けられているのは、複合施設として設置された場合の公会堂に特徴的なつくりである。

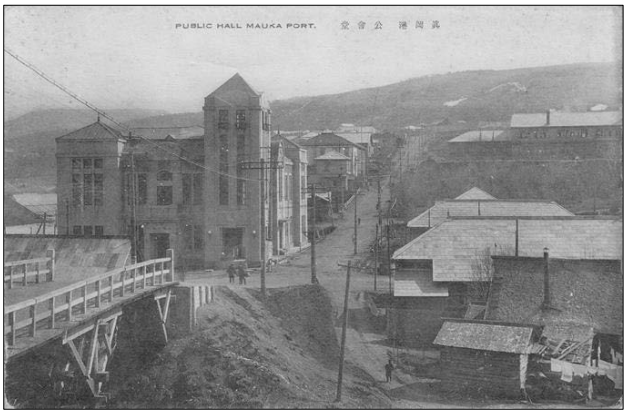

図 11-1：真岡公会堂　（現存せず/絵葉書筆者蔵）

図 11-2：真岡公会堂
（札幌中央図書館デジタルライブラリー蔵）

図 12：真岡公会堂跡地
図 11-1 の橋の右側に相当する場所から撮影。
急勾配の坂の下に建っていることがわかる。

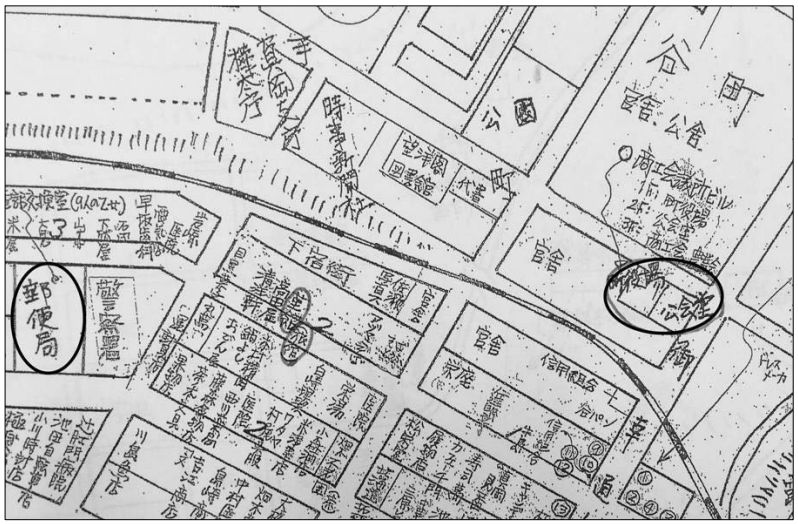

図 13：真岡公会堂の位置（(一社）全国樺太連盟[10)]）

図 11 の橋が三宅橋、図 12 の左側のアーチのかかっている通りが地図上の御幸通り。地図左側（線路より下）に見える郵便局は 1945 年 8 月 20 日に 9 名の女性電話交換手が自決した「真岡郵便電信局事件」の発生現場。建物は代わっているが、現在も同じ場所で郵便局業務が行われている。

図 14-1：コミュニティセンター
公会堂跡地の向かい側に位置する

図 14-2：コミュニティセンター内のホール
隣にはギャラリーも併設されている

図 14-3：ダンスの講座の活動報告

図 14-4：子ども向けの歌唱講座
9/2 の戦勝記念日のイベントに向けた練習

4. 大泊

豊原から南へ 40Km、アニワ湾北部に位置する港町で、日本からの連絡船が特に頻繁に入港するため、貨客の乗降が多かった。海岸線が単調な樺太には天然の良港が乏しいため、日本政府は調査の末、1911 年に工費 50 万円を投じて 7 万坪を埋め立てて築港した（西鶴 1939:249）。この町には、公会堂という名称の建物は存在しなかったが、大正天皇の即位を契機として 1915 年に設置された「大礼記念館」が、公会堂に類似した用途で使用されていた。木造 2 階建の洋風建築で、役場や図書館にも転用され、大泊を代表する公共建築であった（図 15）。

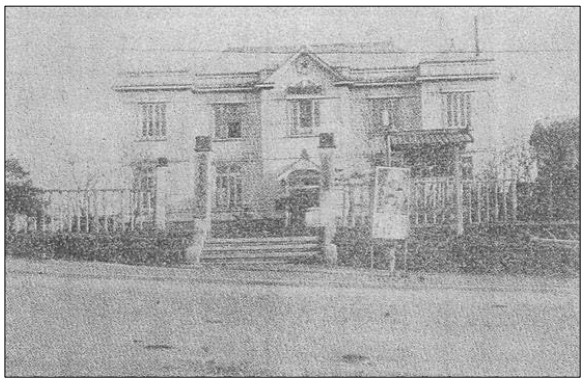

図 15：大礼記念館（『樺太大泊史』[11]）

図 16：大礼記念館跡地（Google Map[12]）

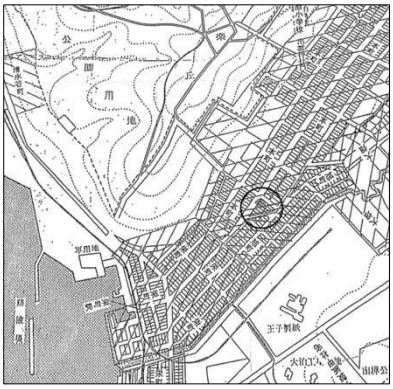

図 17-1：記念館の位置

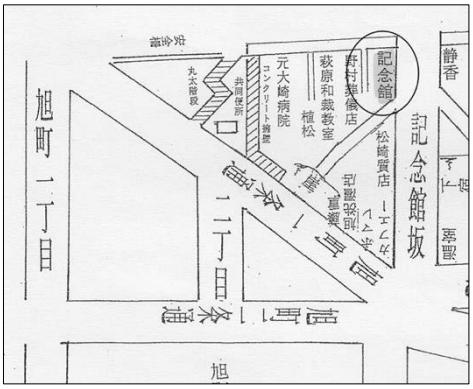

図 17-2：記念館の位置

（いずれも（一社）全国樺太連盟[13]）

分岐した三角形の地形が特徴的な場所に建っていた。現在も地形がそのまま残る。図 17-2 の斜めの道（図 16 の下段）は平坦で、上段が坂道。図 16 の看板の奥の階段の辺りが図 17-2 の記念館坂と考えられる。記念館が坂の途中に建っていたことが図 15 の道路の傾斜からもわかる。図 18 は図 17-1 の地図の左から上の丘から港を見下ろした位置からの写真。

図 18：高台から見た港

日本時代の桟橋が残る

図 19：レーニナ広場

9/2 の戦勝記念日のイベントに向けた練習風景

おわりに

今回の現地調査・資料調査からわかったことを三つ挙げる。一つは行啓や「大典」「大礼」の記念行事を契機として公会堂が設置されたことである。皇室関連行事を設置の契機とする事例は「日本内地」の複数の都市や他の植民地でも見られる。しかし皇太子が数日にわたって滞在し、複数の町を行啓することを契機として公会堂が設置された植民地は樺太以外には見られない[14]。先住民族との軋轢を懸念する必要がなかったためである。このような状況には首都・東京から離れた最北端の樺太も日本の領土であることを示したい政府の意思と、天皇制の一部に属していることを承認されたい住民の希望が反映されている。当時の日本人が漢民族の華夷思想に近い感覚を持っていたと指摘することもできる。行啓には視察の目的だけでなく、「辺境」に存在する人々を「蛮夷」「夷狄」ではなく、「文明人」として認める意味もあったのである。多くの点で樺太の行啓は北海道の事例と類似する一方で、北海道では多く見られた皇太子の公会堂での宿泊事例は見られず[15]、御召艦で船中泊をしている。『樺太日日新聞』に「公会堂愈々落成」という記事が載るのは行啓の 9 日前の 1925 年 7 月 29 日で、「遠藤組の強行軍に依つて工事を整へ」とあることから工期に余裕が無く、宿泊の設備や体制を整えることが困難であったと解釈できる[16]。皇太子は公会堂に宿泊しなかったものの昼食休憩のため訪問はしており、隣室に陳列された特産品などの見物もしている。訪問前には消毒が施され、訪問後には御在所が一般に公開され、その後「役場」として使用されるようになった。「大宅（おおやけ）・大家（おおやけ）（天皇・皇太子＝公（おおやけ））」が来ることによって公会堂が設置され、「浄め」られ、そしてその「有り難い場所」が広く一般に開かれることによって一般民衆のものになるというプロセスは、その後の日本人の「公共」に対する意識に影響を与えたと考えられる。このような「公」の場所として印象づけさせる演出は、樺太に住む日本人にとっては、違和感なく受け入れられたと考えられるが、他民族にとってはどうだったのだろう。この天皇との垂直関係による「公」の論理は「日本内地」もしくは植民地の日本人の間でのみ受容されていたとするならば、植民地で先住民族や他民族が理解していた「公」の意味には違いがあったと考えられるため、それを具体的に確認する必要がある。

二つ目は公会堂が役場と併設されていることである。朝鮮半島では日本人の居留は 1876 年の「日朝修好条規」の締結に始まり、当初は開港した港町（釜山、元山、済物浦（仁川））の居留地に居住していたが、次第に条約を無視して土地の売買を行い、居住・定住を始める日本人が多く現れ、韓国併合の年には既に 17 万人の日本人が居住していた。韓国併合前の 1906 年に「居留民団法」により「居留民団」が設立され、居留民社会では領事館から委任を受ける形で、居留地の公共事業を行なった。そしてこれらの人々が集い、「自治」を行う場として設置されたのが公会堂であった。公会堂は当初は民団の所有であったが、民団廃止後は「府[17]」の所有になり、商業会議所が管理をする事例が多く見られる。商業会議所（のちに商工会議所）に併設されていたものが、1920 年代後半になると次第に地方行政体（府）の主導によって設置されるようになる。樺太の場合、規模の違いはあるにしろ、最初から地方行政体が公会堂を設置していた。この状況をさらに考察することで、朝鮮の事例の特徴がより明確に浮かび上がると考えられる。

三つ目は樺太の最大の特徴は先住民族の数が少なく軋轢がほぼなかったこと、植民地でありながら日本人がマジョリティであったことが挙げられる。朝鮮では在朝日本人は 1920 年代には 40 万人を超え、最も多い 1942 年末には 75 万人を超えたが、朝鮮人の全人口約 2500 万人に対しては約 2〜3%であった。

1925 年の統計では在来都市の京城・平壌での日本人の比率は 20〜30%、港町の釜山、群山では 33〜38%と高い値を示しているものの、樺太では日本人が約 95%であったことを考えると、同じ植民地でも状況は大きく異なる。この事実が公会堂を取り巻く状況にどのように影響したのかを考察することが、今後の課題である。樺太の場合、公会堂はおそらく日本人が占有していたと考えられる。調査中に公会堂で行われた催事として「県人会」が挙げられた[18]。移住の際、同国人・同郷人を頼り、共通点で括ることで形成されたコミュニティに属することは、安心感を得るためにも必要なことである。しかし一方で、約 5%の朝鮮人たちはどこでどのように集っていたのか。朝鮮人たちのための集会施設は存在したのだろうか。朝鮮半島では朝鮮人たちが自分たちのコミュニティに、日本人コミュニティとは別に公会堂を設置していた事例を大邱（朝陽館）と平壌（白善行記念公会堂）に確認しているが、人数比で考えると困難が推測される。

また上記三点とは別の角度からの視点になるが、ホルムスク（旧真岡）では公会堂の跡地に隣接する場所に現在、公会堂に類似する機能を持ったコミュニティセンターが建てられていた。ソ連時代を経てなお、場所性が引き継がれた事例として興味深い。また人が集まる場所として、ソ連時代には街ごとに「レーニナ広場[19]」という「広場」が設置された。コルサコフ（旧大泊）の広場では、翌々日の 9 月 2 日の戦勝記念日の式典に向けた行進の練習が行われており（図 19）、地域住民にとっての集会場所として現在も機能していた。日本時代の地図にはいずれの街にも「広場」は確認されない。誰もが自由に出入りすることのできる公的な空間として、街に「広場」を作る伝統のなかった日本の文化の中で、公会堂がヨーロッパ的な意味での「広場」の役割を果たしていたと考えるならば、それがなぜ「野外」ではなく「屋内」だったのかという点についても、日本の政治史、芸能史、劇場史とも合わせて考察する必要がある。樺太や北海道の場合、極寒の地であるという理由が頭に浮かぶが、「日本内地」や南国の沖縄、台湾でも「広場」ではなく建物としての「公会堂」が積極的に設置された。同じく誰でも自由に出入りできる場所として近代以降「公園」は作られたが、なぜ「広場」は作られなかったのか。2012 年に施行された「劇場・音楽堂等の活性化に関する法律」の前文には「さらに現代社会においては、劇場、音楽堂等は、人々の参加と共感を得ることにより「新しい広場」として、地域コミュニティの創造と再生を通じて、地域の発展を支える機能も期待されている」とある。文化施設論としても探究すべき課題である。

今回調査した場所以外にも、絵葉書資料や先行研究などでドリンスク（旧落合・1933 年落成）、マカロフ（旧知取・1936 年落成）、ポロナイスク（旧敷香・落成年不明）、トマリ（旧泊居・落成年不明）には公会堂の設置が確認されており、いずれも役場に併設されている。またウグレゴルスク（旧恵須取）、チェーホフ（旧野田）、ゴルノザヴォーツク（旧内幌）、レソゴルスク（旧北小沢）、ヤスノモルスキー（旧阿幸）などにも公会堂に類似する「会館」などの存在が確認される[20]。日本時代の記憶を持つ住民もしくは引揚者へのヒアリングはできていないため、今後の課題である。

調査したいずれの地域においても公会堂は現存しなかったが、設置されていた場の実見は重要で、その町のどのような場所に設置されていたのか、そしてその場所が現在どのように引き継がれているのかを確認することはできた。資料状況が恵まれない中で、一般社団法人全国樺太連盟では多くの資料を提供いただいた。この場を借りてお礼を申し上げたい。

脚注

1) この時期、皇太子は摂政として大正天皇に代わって執政を行なっていたため「摂政宮」と呼ばれたが混乱を避けるため皇太子で統一する。
2) 皇太子一行は 8 月 2 日に横須賀港を御召艦長門で出港、6 日に大泊着、7 日豊原、8 日小沼（豊原、小沼へは大泊から鉄道で移動。いずれも夜は大泊へ戻って御召艦に宿泊）、9 日に大泊を発ち、10 日に真岡、本斗を訪問し、14 日に横須賀港入港の行程で行啓を行なった。1907 年に皇太子時代の大正天皇が朝鮮を訪問しているが、併合前の朝鮮半島には未だ本格的な規模の公会堂が設置されておらず、宿泊先は全て統監官邸だった。
3) 一般社団法人全国樺太連盟・永井伸子氏からの情報。元住民への電話でのヒアリングによる（2019 年 7 月 22 日）。
4) 現地ガイドの説明による（2019 年 9 月 1 日）。
5) 樺太庁『樺太施政三十年史』1936 年（公文書館デジタルアーカイブ：https://www.digital.archives.go.jp）。
6) 樺太の公会堂で行われた催事内容を確認できた唯一の事例である。公会堂の催事内容を確認することで、地域における公会堂の役割を確認することができる。そのためには日時と場所が明記されている当時の新聞記事を頼る方法が最も正確ではある。『樺太日日新聞』はいくつかの図書館に所蔵はあるものの、そのほとんどはマイクロフィルムで、データベース化されている記事は一部しかないため、調査が困難である。
7) 監修竹田輝雄、氏家等、尾形芳秀『樺太を生きる 樺太関係資料 図録』（一社）全国樺太連盟 2016：130.
8) 一般社団法人全国樺太連盟の住民団体が元住民からのヒアリングで作成した地図資料。
9) 監修竹田輝雄、氏家等、尾形芳秀『樺太を生きる 樺太関係資料 図録』（一社）全国樺太連盟 2016：96.
10) 前掲注 7 に同じ。
11) 西鶴定嘉『樺太大泊史』国書刊行会、1939：249.
12) 下車できる場所ではなかったため車内から跡地を確認。写真は該当場所を Google Map ストリートビューで再検索したもの。
13) 前掲注 7）に同じ。
14) 北海道は樺太以上に盛んに行幸啓が行われ、宿泊に供するため積極的に公会堂が設置された。北海道を「内国植民地」と捉えるなら、獲得に成功した唯一の植民地と言える。
15) 戦前期の行幸啓では、公会堂以外には宿泊は学校や県庁などの「公共施設」が選ばれた。受け入れ側の煩さと宿泊する側の不便を考えると理想的であったとは言い難いが、それでも天皇の身体を通した「公」の喧伝には必要な営みであったと考える。
16) 1925 年以降も皇族らが訪問しているが、いずれも公会堂での宿泊事例はなく、樺太各地に設置された王子製紙工場の倶楽部が使用されている。
17) 現在の日本の市とほぼ同規模の行政体。
18) 前掲注 3）に同じ。
19) レーニンの名は広場だけでなく通りの名前にも残っている。そのことに違和感を覚えたが、現地ガイドによると「古いものを残したい」と考える住民が多いのが理由だという。日本では全く見ることのできない「奉安殿」も複数残されていた。単なるノスタルジーではなく、幾重にも重なる歴史のレイヤーに対する真摯な態度とみる。
20) 一般社団法人全国樺太連盟における調査（2019 年 7 月 22 日）で、地図資料上に確認。

参考文献

井潤　裕

2000　『日本期の南サハリンにおける建設活動に関する研究』博士論文、北海道大学

中山　大将

2014『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成－周縁ナショナル・アイデンティティと植民地イデオロギー』京都大学学術出版会.

原　武史

2007『増補　皇居前広場』筑摩書房.

2011『可視化された帝国－近代日本の行幸啓』みすず書房.

李　東勲

2019『在朝日本人社会の形成－植民地空間の変容と意識構造』明石書店.